

編集後記

1990（平成2）年4月に開学した富山県立大学は、2010年に開学20周年を迎える。その記念事業のための実行委員会が2009年9月10日に発足した。記念事業の一つとして『富山県立大学二十年史』を作ることになり、編集委員会の設置が決定された。編集委員会には7月の式典には間に合うように、『県立大学十年史』に準じて、2000年4月から2010年3月までの過去10年間を中心にして編集するという基本的な方針が示された。それに基づいて編集委員会が10月9日に開かれ、数名の幹事が選出され、実際の編集作業に携わるようになった。幹事会は4回開かれ、常時、電子メールや電話で連絡・相談しながら作業を進めた。基本的な資料については自己点検評価や外部評価の資料を使うこととし、2月下旬には本体部分ができ上がり、担当学科や部局の批正を受けることができた。また、実行委員会と編集委員会は翌（平成22）年度にまたがり、各学科主任及び事務局員の異動があった。しかし、記念誌としてのおおよその体裁は幹事各委員のご努力で、3月の末日までにできあがっていたので、その影響は最小限に抑えることができた。

題字は大谷技術短期大学第1回の卒業生で書道家の浦野泰子氏に揮毫をお願いした。巻頭部分のカラー写真は各幹事に「県立大学ニュース」の表紙の写真からそれぞれ推薦していただいた。随想・論説は中が「県立大学ニュース」の中から20点を、池上委員が「千瓢」や「飛翔」から数点を選び、学科のバランスや記事の内容を考えながら最終的に19点に絞り、古い順に配列した。版もB5からA4の大きさにして写真も多く入れ、読みやすく楽しいものにしようということであった。

この10年間は知能デザインや生物工学科の新設、短大部から環境工学科への転換など、構成学科が多くなり、地域連携センターやキャリアセンター、生協の設置など研究・教育支援のための施設も整備された。全国の大学の統廃合の流れの中で、生き残りをかけてのJABEEやFD研修、外部評価や学位授与機構による認証評価、これだけの小規模の大学でありながら現代GP・特色GPを5回も獲得したことなど、疾風怒濤の大変な時代を経験した。『十年史』の形式を志向していながら、『十年史』を大幅に上回るページになったのは致し方ない。

『十年史』の随想・論説を読んでいると、開学当初にご活躍になった先生方の夢が、幅広いにおいたつような教養の香りとともに漂ってくる。この『二十年史』は、真摯に実直に研究と教育に取り組んでいる先生方の姿が見えてくる。そういう意味ではこの10年間は、開学期の先生方の夢を根付かせるための10年間であり、実に困難な期間であったとあらためて実感する。

科学技術が人類の幸福に絶対的に貢献するという人々の夢が揺らいでいる今、『三十年史』が書かれる頃、この大学はどのように変わっているのでしょうか。開学以来の20年間で振り返り、本学の将来に思いを馳せながら筆を置くこととする。

最後に、執筆・編集等、お世話になった方々に深甚の感謝を捧げます。ことに幹事の皆さま、総務課の密さんと松崎さんには大変ご面倒をおかけしました。本当に有難うございました。

2010年（平成22）5月7日 中 哲裕 記す

編集委員長：教養教育 中 哲裕
委員：教養教育 佐藤 幸生（後任 原口志津子）・石森 勇次（幹事）
機械システム 石塚 勝（後任 春山 義夫）・舟渡 裕一
知能デザイン 安達 正利（後任 大島 徹（幹事））
情報システム 松田 敏弘（後任 松田 弘成）・石坂 圭吾
生物工学 中島 範行・岸本 崇生
環境工学 川上 智規・能登 勇二（幹事）
後援会参与 牧野 弥一
同窓会理事 池上 勁（幹事）
総務課 境 博紀（幹事）
教務課 高畑 淳一
事務担当：総務課 密 衛（後任 松崎 哲朗）（幹事）

富山県立大学二十年史 - 2000. 4 から 2010. 3 を中心に -

2010年（平成22）7月 発行

編集 富山県立大学二十年史編集委員会
編集長 中 哲裕

発行 富山県立大学開学20周年記念事業実行委員会
委員長 高尾 邦彦
〒939-0398 富山県射水市黒河5180
TEL0766-56-7500（代表）

印刷 北日本印刷株式会社

題字は、富山県立大学の前身、富山県立大谷技術短期大学の一期生の
浦野泰子（紅雨）さん